

調査報告

愛知県豊山町常安寺の木造釈迦如来 及び阿難・迦葉像の調査

Investigation of wooden statues of Shākyamuni Buddha, Ānanda and
Kāśyapa at Jōanji Temple in Toyoyama Town, Aichi Prefecture.ōji

小野佳代*

Kayo ONO

キーワード：未指定文化財，常安寺，釈迦如来，阿難，迦葉

Key words : Undesignated cultural property, Jōanji Temple, Shākyamuni Buddha, Ānanda,
Kāśyapa

要約

2024年3月14日(木)にはじめて愛知県豊山町の曹洞宗寺院、常安寺を訪問した。目的は本尊の釈迦如来及び阿難・迦葉像を拝見するためであった。この三尊像は昭和20～30年代には専門家らによって調査されたが、その後調査されずに未指定文化財のまま伝来している。江戸時代から明治時代にかけて、常安寺には多くの参拝者が訪れ、賑わったことが記録に見える。当地域の歴史を語る仏像でもあったことから、2024年10月25日(金)に改めて常安寺を訪れ、三尊像の調査を実施した。調査の結果、南北朝時代の像と推定された。また三尊像の伝来を検討したところ、もと肥後国河尻(現熊本県河尻)の仏像で、当地域の領主であった溝口氏が永楽銭百貫文を喜捨して求め、常安寺に安置した像であった。

abstract

On March 14, 2024, we visited Jōanji Temple, a Soto Zen Buddhist temple in Toyoyama Town, Aichi Prefecture, for the first time. The purpose was to see the statues of the main deity, Shākyamuni Buddha, Ānanda, and Kāśyapa. These three Buddha statues were investigated by experts in the 1940s and 1950s, but have not been studied since then and remain undesignated cultural properties. Records show that during the Edo and Meiji periods, Jōanji Temple was visited by many worshippers and was a bustling place. Since these Buddha

* 東海学園大学人文学部人文学科

statues also tell the history of this region, we visited Jōanji Temple again on October 25, 2024, to conduct a further investigation of the three statues. The investigation revealed that these Buddhist statues were created during the Nanboku-cho period. Furthermore, upon investigating the origins of these Buddha statues, it was discovered that the three statues originally came from Kawajiri in Higo Province (present-day Kawajiri, Kumamoto Prefecture), and that the Mizoguchi clan, who ruled the entire Toyoba village, donated one hundred kan of Eiraku coins to acquire them and enshrine them at Jōanji Temple.

はじめに

令和6年(2024)3月14日(木)、名古屋造形大学名誉教授の池田洋子先生を誘い、愛知県豊山町に所在する曹洞宗寺院の常安寺を訪問した。目的は本尊の釈迦如来及び阿難・迦葉の三尊像を拝見するためであった。目的の三尊像は、常安寺本堂の須弥壇上の厨子内に安置されていた。中央に本尊の釈迦如来坐像、左脇に迦葉立像、右脇に阿難立像という配置であった。常安寺は、平成25年(2013)刊行の『愛知県史』編纂のための事前調査で、専門委員が同寺院を訪れているが、その時は上記の三尊像の調査は行われなかったという。

しかし昭和48年(1973)に刊行された『豊山町史』の常安寺三尊像の解説をみると、「文部技官丸尾新三郎の鑑定によって、平安末期か鎌倉初期の作と推定された。三体とも高さ約五〇糎で、三体のうち迦葉尊のできばえが抜群である。」と記されている(1)。過去に三尊像の調査が行われていたのであった。丸尾新三郎が丸尾彰三郎の誤りであれば、彰三郎が文部技官になったのは昭和21年(1946)であるから(2)、在任中に同寺院を訪れ、釈迦と阿難・迦葉の三尊像の調査をしたと思われる。加えて同寺院には、昭和27年(1952)12月17日付の文書が残っており、当時の常安寺住職と檀家総代の連名で、愛知県重要文化財審議会宛てに三尊像の調査を依頼している。丸尾彰三郎による調査後に、三尊像の美術史的な価値を知り、愛知県の文化財指定を検討したのであろう。しかし今に至って常安寺の三尊像は文化財に指定されていない。一方で、同寺院の銅造誕生釈迦仏(高さ13.5cm、鎌倉時代)が昭和30年(1955)5月6日付で愛知県指定有形文化財となっていることからすると、県の調査員は三尊像ではなく、誕生釈迦仏の方を高く評価したと思われる。

さらに常安寺には昭和39年(1964)9月2日消印の郵便はがきが残っている。差出人は愛知県教育委員会の社会教育課文化係の田中健氏で、9月6日(日)の午後に佐々木隆善先生と訪問し、文化財図録作成のために釈迦像と脇仏を調査したい旨が書かれている。このように常安寺の三尊像は昭和20~30年代にかけて専門家がたびたび寺院を訪れ、調査をしていたのである。その頃に撮影したと思われる阿難・迦葉像の白黒の写真も残っている。

冒頭で述べた通り、昨年(2024年)3月に常安寺で三尊像を拝見し、それらの像に南北朝時代の

特徴がみられたことから、後日改めて調査させていただくことにした。令和6年(2024)10月25日(金)、先の昭和39年の調査から60年の時を経て、調査する機会をいただいた。調査は池田洋子先生と高橋寛氏と小野の3人で行った。その調査結果を報告するとともに、三尊像の伝来についても検討してみたい。



図1 釈迦如来及び阿難・迦葉像 豊山町常安寺

一、調査の概要 (図1~24)

〔形状〕

(1) 中尊 釈迦如来

本体 ^{らほつ}螺髮旋毛形(右旋)。^{につけいしゆ}肉髻珠・^{びやくごう}白毫相をあらわす。^{じだ}耳朶部環状。^{さんどう}三道相をあらわす。內衣・^{くん}裙・^{ふげんえ}覆肩衣・衲衣を着ける。覆肩衣は背部から右肩にかかり、右胸下で一旦衲衣にたくし込まれる。衲衣は左肩をおおって、背面をめぐり、右肩に少しかかって正面にまわり、端を折り返して再び左肩に懸け、背面に垂らす(左腹前辺で下層の布の一部を引き出して上層の布の縁に懸ける)。両手^{くつび}屈臂。両手ともに胸前で掌をやや外側に向け第三・四指をわずかに曲げて説法印を結ぶ。左足を外にして結跏趺坐する。

光背

拳身光。二重円相・光脚・周縁。頭光の中心に八葉蓮華をあらわし、その周りに内より紐二条、圈帯(三か所に宝相華文を象った銅製花飾を打ち付ける)、縁(紐・連珠・紐・列弁)をめぐらす。身光の円相部は、中心を透かし、その周りに圈帯(無文)、界線(紐二条)、圈帯(六か所に宝相華文を象った銅製花飾を打ち付ける)、縁(紐・連珠・紐・列弁)をめぐらす。光脚は蓮弁三弁、間弁付きとし、蓮弁に宝相華文を彫出する。周縁部にはバルメット唐草文、その上縁部に雲文をそれぞれ透かし彫りであらわす。

台座

蓮華座。仰蓮、敷茄子(蓮弁をめぐらす)、華盤(六角形、四方に華足付き)、獅子、受座、蕊、反花、上框(小反花をめぐらす)、下框、基台。

(2) 左脇侍 迦葉

比丘形。老貌。眉をひそめ、わずかに開口する(上下の歯が見える)。耳朶部環状(二連の耳環を付ける)。袈裟と裙を着ける。袈裟は偏袒右肩に着す(左肩をおおい、背面にまわって上縁を大きく折り返して、右腋下を通して正面にまわり、左肘にかける)。裙は正面やや右方で右前に打ち合わせる。両手屈臂し、左胸前で両手(五指)を組む。右足を踏み出し、腰をかかめ、右膝をわずかに曲げて立つ。草履を履く。

(3) 右脇侍 阿難

比丘形。若貌。耳朶部環状(二連の耳環を付ける)。裙・覆肩衣・袈裟を着ける。裙は正面で縁を折り畳み、右前に打ち合わせる。覆肩衣は背部から右肩にかかり腕をおおって垂らす。袈裟は左肩をおおって、背面から右腋下を通して正面にまわり、左肩で大きく折り返し、背面に垂らす。両手屈臂し、胸前で両手を合わせて合掌する。右足をわずかに踏み出して立つ。沓を履

く。

〔法量〕（単位cm）

(1) 中尊 釈迦如来

本 体

像 高 53.7（一尺七寸七分）

髮際高 45.5（一尺五寸）

頂一顎 19.5 面 長 12.8

面 幅 11.8 耳 張 13.8

面 奥 14.3 胸 奥 16.5

腹 奥 18.5 肘 張 34.8

膝 張 44.0 膝 奥 29.0

膝高（左）10.4 膝高（右）9.7

坐 奥 39.3

台 座

全 高 65.5

光 背

全 高 85.5 光背幅 67.0

頭光幅 26.5 身光幅 40.8

(2) 左脇侍 迦葉

本 体

像 高 65.0（二尺一寸五分）

頂一顎 12.7

面 幅 7.5 耳 張 10.2

面 奥 12.3 胸 奥 11.5

腹 奥 11.5 肘 張 23.1

袖裾張 21.5 裙裾張 19.0

裾 奥 11.8 足先開 17.8

光 背

全 高（柄含まず）75.0

頭光幅 22.8

台 座

全 高 23.5

(3) 右脇侍 阿難

本 体

像 高 65.1 (二尺一寸五分)

頂一顎 12.6

面 幅 8.0 耳 張 9.7

面 奥 11.3 胸 奥 12.0

腹 奥 13.7 肘 張 23.1

膝 張 39.2 膝 奥 27.6

袖裾張 23.8 裙裾張 17.5

裾 奥 9.6 足先開 12.0

光 背

全 高 (柄含まず) 74.5

頭光幅 22.5

台 座

全 高 24.8

〔品質構造〕

(1) 中尊 釈迦如来

本体 木造。寄木造り。金泥塗り・彩色・盛上文様、切金。肉髻珠・白毫水晶製。玉眼 嵌入。

頭体幹部は耳の中央と後ろの二カ所で前後三材を矧ぐ(接合する)。頭部三材は各左右にも矧ぐ。内刳りのうえ、三道下で割首する。体幹部前面材には像心束を彫り残し、体幹部材には両腰脇辺に前後束を彫り残す。左右肩以下の体側部は各前後二材矧ぎとし、内刳りする。体幹部と両体側部の間には各一材(襜材)を挟む。両脚部は横木一材を矧ぎ、内刳りする。裾先を矧ぐ。さらに両前膊を覆う袖部、両手先を矧付ける。体幹部と両脚部の矧ぎ目を4つの太柄(後補)で留め、2か所に銚(1カ所欠)を打ち込む。両脚部と裾先の矧ぎ目には方形の滑り留め板を嵌め込む。内刳り面は黒漆塗り。

唇に朱彩。眉や口髭・顎髭を墨で描く。玉眼は瞳を黒であらわし朱で縁取る。白眼白。着衣部は金泥彩に盛上文様(唐草文、蓮華唐草文、鳳凰文、団花文)・切金文様(麻の葉文、雷文、七宝文)を配する。

光背 檜材。漆箔。

二重円相部・光脚背面部を通し、^{なで} 豎材数材を矧ぐ。光脚正面に横木大略一材を貼付け、光脚を彫出する。頭光圏帯部及び身光外圏帯部に銅製飾金具を付ける。周縁部は透かし彫りとする。

光脚下部に幅広の柄を設け、台座上に立てる。

台座 檜材。漆箔及び彩色仕上げ（獅子座彩色、玉眼）、一部黒漆塗り。

(2) 左脇侍 迦葉

木造。寄木造り。金泥塗り・彩色・盛上文様。玉眼嵌入。耳飾（銅製）。

頭体幹部は両耳後ろを通る線で前後二材矧ぎ。内削りのうえ、割首する。頭部は面部でも矧ぐ。体幹部材に左体側部と右腕を矧ぐ。左体側部は前膊を覆う袖部と手首で矧ぐ。右腕は肩・肘・手首で矧ぐ。背面や衣の張り出した部分にも別材を矧ぐか。両足柄を草履裏に挿し込み矧ぐ。唇に朱彩。玉眼は瞳の中心黒。周囲に金、薄青色（現状茶色）を施すか。像表面は布貼りし、錆漆下地、黒漆塗り、白下地に金泥。着衣部彩色、盛上文様（唐草文、蓮華唐草文等）。

光背 円光（輪光）は銅製鍍金。木製棒状の柄に取り付けて、台座に挿して立てる。

台座 礼盤座の上に岩座を重ねる。岩座背面に光背の柄の受け台を取り付ける。

(3) 右脇侍 阿難

木造。寄木造り。金泥塗り・彩色・盛上文様。玉眼嵌入。耳飾・腕釧（銅製）。

頭体幹部は左耳の前と右耳後ろを通る線で前後二材矧ぎ。内削りのうえ、首より下（胸前）で割る。頭部は面部でも矧ぐ。体幹部に左右側部を矧ぐ。左右体側部は前膊を覆う袖部と手首で各矧ぐ。両足柄を沓裏に挿し込み矧ぐ。

唇に朱彩。玉眼は瞳の中心黒、周囲に金（右目のみ）、薄青色（現状茶色）を施すか。像表面は布貼りを施し、錆漆下地、黒漆塗り、白下地に金泥。着衣部彩色、盛上文様（唐草文、蓮華唐草文、団花文等）。

光背 円光（輪光）は銅製鍍金。木製棒状の柄に取り付けて、台座に挿して立てる。

台座 礼盤座の上に岩座を重ねる。岩座背面に光背の柄の受け台を取り付ける。

[保存状態]

(1) 中尊 釈迦如来

本体 体幹部の前後束、像底の体幹部と両脚部の矧ぎ目の太柄すべて、裙先の滑り止め板、以上後補。左手第二・三指半ばに折れの跡あり。

光背 二重円相の周縁部透かし彫りの漆箔層、後補。周縁部に修理の手が入るか。

台座 台座内部の補材、後補。漆箔・彩色層も多く後補か。蓮弁に折れの跡あり、後補箇所もあ

るか。

(2) 左脇侍 迦葉

本体 材の矧ぎ目周辺の茶色の層（砥の粉か）は後補。

光背 柄、後補。

台座 礼盤座、岩座、岩座背面の光背柄の受け台、すべて後補。

(3) 右脇侍 阿難

迦葉像に比べて保存状態がよく、盛上文様もよく残る。台座・光背の保存状況は迦葉像に準じる。

[墨書]

本尊釈迦如来像の台座内心棒の全面に墨書銘（図24・25）があるが後述する。本尊の台座の返花の上面、裏面にそれぞれ下記の銘がある。

・台座（反花）の上面

尾州春日郡／豊場村常安寺／南無釋迦牟尼佛／南無釋迦牟尼佛

□□□作也／□□□□也

他にも読めない文字がある。

・台座（反花）の裏面

永□□□□／萬松山常安寺／常安寺

補材箇所

明曆貳歳／丙申 卯月吉日 花押

尾州春日郡豊場村／萬松山常安寺

□ 躰代再興

落書きが多くみられる。

・礼盤座裏

釈智英恵妙塞

妙仙昌順

小針邑栗崎昌慶

施主

當村 つる

二、製作年代

前章の調査結果をふまえ、釈迦如来及び阿難・迦葉像の製作年代を考えていきたい。まず釈迦如来坐像は、額が四角く張った頭部で、目の見開きが小さく、切れ長である。眉と目の間隔が狭く、やや癖のある面貌にあらわされる。体つきも全体に四角い印象を受ける。とくに背面ではその印象が強い。また衣の表現も装飾的で、左肩にかかる衣の折り返し部の正面、左胸前辺りの衣縁にC字形の曲線をつくり、脚部の衣文にもうねりのある曲線を多用している。また像底をみると、体幹部の前面材に像心束を彫り残し、両腰脇辺にも前後束（現在は後補材となる）を彫り残す点にも特徴がみられる。常安寺釈迦像にみられるこれらの形式・構造上の特徴は、南北朝時代から室町時代頃の院派系統の仏師に通有するものである。さらに、釈迦像の衣の表面には、胡粉で盛り上げたとみられる文様も残っている。これもまたこの期の仏像に広く行われたものである。脇侍の阿難・迦葉の両像も頭体ともに四角い印象が強く、像全体の仕上げや衣に施された盛り上げによる蓮華や唐草の文様が釈迦像と共通することから、これら三軀は同時期に製作されたセットの像と考えられよう。

南北朝時代の院派の作例としては、観応3年（1352）に院吉一派（院吉・院広・院遵作）が手掛けた、静岡・方広寺の釈迦三尊像がよく知られている。院吉とは、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した仏師で、暦応2年（1339）に足利氏の菩提寺・等持院の本尊地藏菩薩像を造立して等持院大仏師となった人物である（3）。院吉一派が製作した仏像は、南北朝期のみならず、室町時代後期まで大きな影響力をもったとされ、なかでも方広寺像は、彼らの様式・技法が完成した作品として評価されている（4）。また愛知県一宮市の妙興寺にも院吉の子と目される「院遵」が関わった釈迦三尊像が伝わっている。貞治4年（1365）の作とされ、両脇侍の文殊菩薩と普賢菩薩の両像頭部内から「院遵」の銘が見つまっている。この二つの寺院の中尊像と、常安寺の阿弥陀像を比較してみたい。

①観応3年（1352）の静岡・方広寺釈迦如来像（図26）、②貞治4年（1365）の愛知・妙興寺釈迦如来像（図27）、③豊山町常安寺釈迦如来像（図28）を比較すると、頭体の四角い形状や衣文の皺の作り方、曲線を多用する点などが共通していることから、③常安寺像は南北朝時代の作例とみることがまずは可能であろう。さらに細かくみると、①方広寺像の衣文の皺がもっとも装飾的で、彫りも深く、勢いがある。顔から受ける印象も①方広寺像が一番強い。それに対して、③常安寺像は①方広寺像、②妙興寺像よりも衣文の彫りが弱く、落ち着いている。③常安寺像は、②妙興寺像が製作された貞治4年（1365）よりやや時代が下るのではなかろうか。②妙興寺像と③常安寺像の側面感を比較すると（図29・30）、③常安寺像には厚みがあり、造形的に見どころがある。頭部や耳の形状、構造などが院吉の一派とは異なることから、院派仏師の中でも別系統の仏師の作であろう。製作年代は、貞治4年（1365）作の②妙興寺像以後、1380年代頃までを想定しておきたい。

三、釈迦如来及び阿難・迦葉像の伝来についての検討

常安寺の釈迦如来及び阿難・迦葉像の三尊像に関するもっとも古い文字資料は、釈迦像の台座内から見つかった心棒の墨書銘(図25)である。明暦3年(1657)の修理銘も書かれていることから、その頃の常安寺に伝わっていた三尊像の由来(由緒)が記されたものと考えてよいだろう。そのほか江戸時代の尾張藩の地誌などにも常安寺の三尊像のことが記されている。以下、管見に及んだ常安寺の資料を古い順にみていきたい。

1. 常安寺釈迦如来像の台座内心棒銘 明暦3年(1657)

此本尊釈迦如来并二尊者於肥後河尻樂錢求來百

貫文也里人如伝口則起毘首羯磨之造像也因

□不勝悲歎追慕之情溝口蔵田為母^暗摸擦而

今安坐万松山常安寺者也矣古今縁起於後代

比丘莫失々々 吉祥如意々々 奉再興三仏者也 九世孫綱外代

于時明暦三丁酉季 仏工安阿弥之孫

于時大永元 辛巳年二月拾五日

高野左京

□□^叟書之

願以此功德普及於一切我等与衆生皆共成仏道

(大意)

釈迦如来像及び二尊像は、肥後河尻より永樂錢百貫文で求めた像で、里人によると毘首羯磨が造立したものである。溝口蔵田が母の追善のために探し求めて万松山常安寺に安坐したものである。この縁起が後代の比丘に伝えられ、吉祥(幸運)が意のままに続きますように。大永元年(1521)2月15日。願はくばこの功德をもって、普く一切に及ぼし、我等と衆生がみなともに悟りを得られますように。これら三尊像は、明暦3年(1657)、仏工安阿弥(快慶)の孫、高野左京が修理をした。

ここには、常安寺三尊像の由緒として、①本来の所在地、②発願者、③発願理由、④購入費用、⑤仏師名、⑥常安寺に安置した年について書かれている。以上の点から内容をまとめると、常安寺の三尊像はもと①肥後河尻、すなわち現在の熊本県熊本市川尻町に伝わった像であり、②溝口蔵田が③母の追善のために、④永樂錢百貫文で求めた像であったことがわかる。⑤仏師の毘首羯磨とは、帝釈天の侍臣で、細工物や建築をつかさどる神のことであり、転じて美術工芸に巧みな人のことをいう。具体的な仏師名が伝わっていなかったことから、このような伝承が生まれたと

思われる。肥後河尻より常安寺に移坐したのは、⑥大永元年（1521）2月15日であったとも読めるが、あるいは明暦3年の修理時に現存していた縁起が書かれた年月日かもしれない。2月15日は釈迦の涅槃の日である。

2. 『張州府志』（松平君山撰、千村伯濟校）宝暦2年（1752）（5）

在豊場村。号万松山。属熱田円通寺。蓋曹洞古刹。永享中本山明谷義光禪師始建此寺。其後世遠時變。寺亦零衰。大永四年甲申夏六月。当邑城主溝口氏為此寺檀越。欲為父藏田安置仏像。偶肥後州河尻邑有西域毘首羯摩天作所彫刻釈迦牟尼仏。阿難迦葉兩夾侍。遂得之。捨永樂錢一百貫。即安此寺。

（大意）

常安寺は豊場村にあり。万松山と号す。熱田円通寺の末寺で、曹洞宗の古刹である。永享中（1429～41年）に本山の明谷義光禪師がこの寺を創建した。その後、時代が移り変わり、寺院は衰退した。⑥大永4年（1524）の6月に、当邑の②城主溝口氏がこの寺の檀越となり、③父・藏田のために仏像を安置した。たまたま①肥後州河尻邑に⑤西域の毘首羯摩天が彫刻した釈迦牟尼仏、阿難、迦葉の両脇侍像があり、遂に④永樂錢一百貫を喜捨してそれらの像を得て、この寺に安置した。

これによると、常安寺は永享中（1429～41年）に熱田円通寺の明谷義光禪師が創建した寺院で、のち衰退した寺院を、大永4年（1524）の6月に、豊場村の城主溝口氏が寺の檀越となって復興したことがうかがえる。安置した仏像は、先の台座内心棒銘と同じく、肥後州河尻村から永樂錢一百貫で求めた像であったという。先の墨書銘では、仏像を移坐した理由として、溝口藏田が母の追善のためとあったが、ここでは城主溝口氏が父・藏田のために安置したことになっており、内容が変わったようである。尾張藩士の樋口好古が寛政4年（1792）から文政5年（1822）まで31年に渡って記した地誌『尾張徇行記』にも、『張州府志』とほぼ同じ内容が記されている。

3. 『尾張志』（深田正韶撰、植松茂岳校、岡田啓・中尾義稲編）天保14年（1843）（6）

豊場村にあり万松山といひて熱田円通寺の末寺也。永享年中明谷義光禪師の創建なりしが世かはりて廢衰に及ひしを当地の領主②溝口富之助某③其亡父藏田居士の菩提の為に⑥大永四年甲申六月田地を寄附し本尊仏を安置す。此木像もと①肥後国河尻にありしを溝口氏④永樂錢百貫文にて買取しとそ⑤天竺の仏工毘首羯摩天の彫刻にて 釈迦牟尼仏阿難迦葉の三軀なり 俗に此像栴檀香木の根にて彫しとて豊場の根釈迦と呼り。靈仏にて盜賊ぬすみ出んとせしに五躰すくみて悶絶しあるひは持重りして境を出る事あたはざりきといひ伝へたり

ここでも、大永4年に領主の溝口氏が父蔵田のために、肥後国河尻から釈迦・阿難・迦葉の三軀を永楽銭百貫文で買い取って常安寺に安置したことを記すが、先の『張州府志』と異なるのは、発願者にあたる領主の名前が溝口氏から「溝口富之助某」と具体的に記されるようになった点である。また三尊像の作者は毘首羯摩天で変わらないものの、「栴檀香木の根」で作られた話が付加され、江戸時代後期には「豊場の根釈迦」として知られ、霊像として広まっていたことがうかがえる。

4. 『尾張名所図会』(岡田啓・野口道直撰)江戸末～明治初(1844～80年)(7)

豊場村にあり。曹洞宗、熱田円通寺末。永享年中明谷義光禪師の創建なりしが衰微に及びしかば、当地の領主②溝口富之助(傑山良英居士。嘉吉元年辛酉九月九日卒)が③其亡父蔵田居士の菩提の為に、⑥大永四年六甲申再興し、田地を寄附し、且①肥後国河尻村にありし釈迦・迦葉・阿難の三霊像を④永楽銭百貫文にて買ひ取り、当寺の本尊とす。是⑤天竺の仏工毘首羯摩天が、赤栴檀の香木もて刻みたる尊像にて、京都嵯峨の釈迦と同木同作なり。当寺の像は木の根の方にて作りたりとて、俗に豊場の根釈迦と称す。海内に比類なき霊仏にて、嵯峨の釈迦の如く、他所へ開帳に出し奉らむとする事あれば、忽霊異ありて動座し給はず。近年住僧他所にて開帳せんとして移し奉るに、其期に及びて尊像盤石の如く重くなり、其事にかかはりたる者みな大病をうけて、悩甚しかりければ、恐れてやみにけるとぞ。

本尊 本文にいへるが如し。像の台に安置の由来を委しく漆書して伝ふ。

『尾張名所図会』が刊行されたのは江戸時代末から明治初期であるが、執筆年代としては先の『尾張志』とほぼ同時期のもので、江戸時代末頃の内容を示しているといえる。『尾張志』に同じく、大永4年(1524)に肥後国河尻村から釈迦・阿難・迦葉の三尊像を永楽銭百貫文で買い取って移坐した人物を「当地の領主溝口富之助」とするが、その人物の没年を嘉吉元年(1441)9月9日としており、矛盾が生じている。すでに嘉吉元年に没した人物が大永4年に仏像を購入することはできない。仏像を常安寺に移坐(安置)した発願者を溝口氏から「溝口富之助」と特定したのは、天保14年(1843)の『尾張志』からで、そこに誤りがあるのかもしれない。さらに、三尊像が「栴檀香木の根」で作られたという話はさらにエスカレートし、京都嵯峨に伝わる三国伝来の釈迦(清涼寺の釈迦)像と同木同作ということになっている。

5. 『西春日井郡誌』(西春日井郡役所編)大正2年(1923)(8)

常安寺(曹洞宗)豊山村大字豊場字木戸七十六番地にあり。万杵山と号し熱田円通寺の末寺なり。弘仁三年弘法大師今の岡山の丘上に大伽藍を創建したるが、其後保元平治の頃兵火に

懼り堂宇皆焼失せり。されば古は此の丘を御観音山と称したりしを何時の頃よりか岡山といふに至り、尚当時の古跡として丘の南に堂前、塔の構等の名称さへ残れり。其後当地の領主②溝口富之介藤原朝臣③亡父蔵田居士の菩提のため⑥応永元年（1394年）堂宇を今の地に再建し、従来真言宗たりしを曹洞宗に改め、熱田圓通寺二代僧義光を請じて開山とす。本尊は所謂三国伝来の靈仏、根釈迦にして、①元肥後河尻如来寺にありしを②当寺開基溝口氏事に因て九州下向の際、如来寺頽廢して靈像隨侍の僧なきを慨き、④永樂錢百貫文を出して是を購ひ本寺に詔請したるものなり。右は摩利山の名木赤栴檀香木の根を以て、⑤天竺の仏工毘首羯磨天が彫刻したもにして、彼の大和法隆寺の釈迦牟尼の像及山城国嵯峨如来寺の阿難・迦葉の像と同作なりといふ。毎年二月十五日、十六日の縁日には参詣者頗る多く十四日より御籠りをなす者少からず。（下略）

大正2年の『西春日井郡誌』では、常安寺の創建が早まって弘仁3年（812）のことになり、しかも真言宗を開いた弘法大師空海が創建したことになる。明治31年8月の「常安寺略縁起」(9)でも、同様に空海の創建と記されているから、明治以降のどこかで空海の創建寺院として語られるようになったのであろう。また常安寺の三尊像がもと肥後川尻の「如来寺」にあったとされ、ここに初めて如来寺という寺院名が登場する。これも江戸時代の資料には見えないことから、のちに語られるようになったと考えられる。また当地領主の溝口富之介が亡父蔵田居士の菩提のため寺院を再興した年代も早まり、大永4年（1524）から応永元年（1394）のこととして書かれている。加えて、先の『尾張名所図会』で常安寺三尊像は京都嵯峨の釈迦像と同木同作とされていたが、さらに奈良法隆寺の釈迦牟尼の像とも同作ということになっている。明治から大正にかけて、靈驗性を高めるさらなる話が付加されていったと想像される。

おわりに

以上、常安寺の釈迦如来及び阿難・迦葉の三尊像の伝来について検討してきたが、明暦3年（1657）の釈迦如来像台座内の心棒銘以後、時代が下るごとに新たな話が付加されていった。しかし一貫して変わらなかったのは、三尊像がもと肥後国河尻に伝来した像で、毘首羯磨天の作とされていたこと、その像を当地の領主溝口氏が永樂錢百貫文で買い取って常安寺に移坐したという点である。領主溝口氏というのは、一番古い資料に溝口蔵田とあり、母の追善のために探し求めたものであった。それが後には溝口富之助が亡父蔵田の菩提のために求めたものとされたのであろう。溝口蔵田が母のために肥後国河尻で三尊像を求めた年代は大永元年（1521）か、あるいは『張州府志』『尾張志』『尾張名所図会』のいう大永4年（1524）かと思われる。

溝口蔵田とは、『豊山町史』によると、織田氏の家臣で、一色之庄豊場村全体を単独で所領し、大きな居館（溝口城と呼ぶ）を構えて、この地方唯一の小城府を形成した人物であるという。溝

口勝政自筆の記(写し)によると、溝口氏は源氏の流れを汲む一族で、承久の軍功を認められ、美濃国山県郡大桑郷を賜ったといい、以来代々濃州に住んだが、応永年中(1394~1428年)に尾張に移り住み、中島郡溝口(現在の稲沢市溝口)に定着したことから、溝口姓を名乗り、尾張守護代織田氏に仕えたという。また、よく主君織田氏に対し精勤を尽くし、その功績のよって溝口村全体を領有する身分となり、西溝口に自分の本城を構築したともみえる(10)。この溝口氏が衰微していた古寺(常安寺)を復興し、熊本の河尻から釈迦・阿難・迦葉の三尊像を永楽銭百貫文で求めて常安寺本尊として迎えたのである。

冒頭で、本三尊像は現在に至るまで未指定文化財であると述べた。昭和20年代に丸尾彰三郎によって一度は評価された像であったが、県の調査で指定に至らなかったのは、おそらく南北朝時代の像だったからではないかと想像される。しかし現代では、平成26年(2014)に静岡・方広寺の釈迦三尊像(院吉・院広・院遵作、1352年)が国の重要文化財に指定され、令和5年(2023年)には愛知・妙興寺の釈迦三尊像(両脇侍に院遵銘)が県指定文化財に指定された。豊場村の発展に貢献した溝口氏が復興した寺院の本尊であり、溝口氏が自ら九州熊本の河尻より求めた像でもある。江戸から明治にかけて、2月15日の涅槃会の時には多くの信者が常安寺を詣でたようで、細野要斎の『感興漫筆』(11)にもその賑わいの様子が記されている。熊本河尻から愛知豊場(現豊山町)に仏像が移されてから500年である。当地域の歴史の発展とともにあった像であり、まさに当地方の歴史を語る文化財といえるだろう。今なお、2月15日には本堂に涅槃図が掛けられ、釈迦・阿難・迦葉の三尊像の御開帳が行われている。

〔注〕

- (1) 『豊山町史』(豊山町史編集委員会編集、愛知県郷土資料刊行会、1973年)。
- (2) 「丸尾彰三郎」(『日本美術年鑑』昭和56年版、257頁)。
- (3) 清水真澄『中世彫刻史の研究』(有隣堂、1988年)、清水真澄監修図録『中世の世界に誘う 仏像 院派仏師の系譜と造像』(横浜市歴史博物館、1995年)、山本勉『日本の美術』493・南北朝時代の彫刻(至文堂、2007年)、『仏師院吉関係文書』『雨森善四郎氏所蔵文書』(羽田聡「院派仏師とその文書」、津田徹英編『仏教美術論集六 組織論—制作した人々—』所収、竹林舎、2016年)を参照。
- (4) 「木造釈迦如来及両脇侍坐像」(『月刊文化財』609号、新指定の文化財 美術工芸品 重要文化財の指定・彫刻、2014年)。
- (5) 『張州府志(全)』(愛知県郷土資料刊行会、1974年)。
- (6) 『尾張志』春日井郡(東海地方史料頒布会、1979年)。
- (7) 『尾張名所図会』下巻(愛知県郷土資料刊行会、1970年)。
- (8) 『西春日井市郡誌』復刻版(愛知県郷土資料刊行会、1973年)。
- (9) 「常安寺略縁起」は木版刷り1枚の「曹洞宗萬松山常安寺境内之図」に書かれた略縁起である。

当寺創立ノ地ハ、村の東北隅一ノ高地ニアリ観音山ト云フ。今誤テ岡ノ山ト呼フ。高数十間周囲壱里ニ

余レリ嶺平ニシテ、咸ク耕地トナル。往古弘仁三年、僧空海七堂伽藍ヲ建立シ真言開宗ノ道場タリ。保元平治ノ際、兵焚ニ罹リ荒廢地ヲ絶ツモ、其南ニ塔ノ前堂ノ構、其西ニ養梅軒、北ノ坊奥ノ坊等ノ古跡ヲ存セリ。後永享年中村ノ領主溝口富之助氏荒廢ノ寺跡ノ存スルヲ追慕シ、城門木戸ノ西隅ニ移シ再興シ開宗シテ、熱田円通寺ノ二世明谷義光禪師ヲ請シテ開山トス。後チ十二年嘉吉元年九月九日溝口氏卒ス。法名常安寺殿築山良英大居士、後チ七年文安五年六月五日、全氏室没ス。即チ萬松院殿鉄巖妙心大姉、此ニ靈溝口藏田公ノ父母ナリ。後三十三年文明十四年十月十二日開山明谷義光和尚示寂ス。後チ四十三年、大永元年二月十五日溝口藏田肥後国ニ往ケル帰ルサニ、河尻ヲ過キ惟ヘラク此地ニ三国伝来ノ靈像釈尊ノ座マスト聞ク。尋ネ詣テ拝スルニ堂破レ朽ナントス。悲思帰順シテ住持大堯義天禪師ニ謀リ、再ヒ河尻ニ往キ土地ノ同行ニ議シ永楽銭百貫文を寄附シ、請シテ本尊トス。脇士迦葉阿難共ニ赤梅檀ノ瑞像皆毘首羯磨天ノ作ナリ。古今陰曆二月十五日涅槃ノ忌遠近ノ信者詣スル者山ヲナス。委クハ寺伝ノ本縁起ニ詳ナレバ爰ニ略ス。

明治三十一年八月誌

(10) 前掲注1書。

(11) 『感興漫筆(中)』復刻版(『名古屋叢書』20・随筆編、愛知県郷土資料刊行会、1982年)。

〔図版出典〕

図1～25、28・30 高橋寛撮影。

図26 島口直弥編『みほとけのキセキ—遠州・三河の寺宝展—』(浜松市美術館、2021年)。

図27・29 愛知・妙興寺所有。

〔付記〕

2023年12月1日の常安寺本尊・釈迦如来及び阿難・迦葉像の調査では、住職の小林華石師をはじめ、名古屋造形大学名誉教授の池田洋子先生にお世話になり、仏像の移動及び撮影では高橋寛氏に協力いただきました。墨書銘については、東海学園大学人文学部准教授の平野仁也先生よりご助言いただきました。またSNSのX(旧Twitter)の仏像ファンの方より情報提供がありました。ここに記してお礼申し上げます。

なお本稿は、科学研究費補助金基盤研究(C)「愛知県の仏像の特色に関する総合的な調査研究—技法の伝播や人の移動に注目して—」の研究成果の一部です。

※ 写真は次ページ以降に掲載。



図2 釈迦如来像 正面



図3 釈迦如来像 右斜側面



図4 釈迦如来像 背面



図5 釈迦如来像 右側面



図6 釈迦如来像 左側面



图7 釈迦如来像 像底



图8 釈迦如来像 像内



図9 迦葉像 正面



图 10 迦葉像 背面



图 11 迦葉像 左斜側面



图 12 迦葉像 右側面

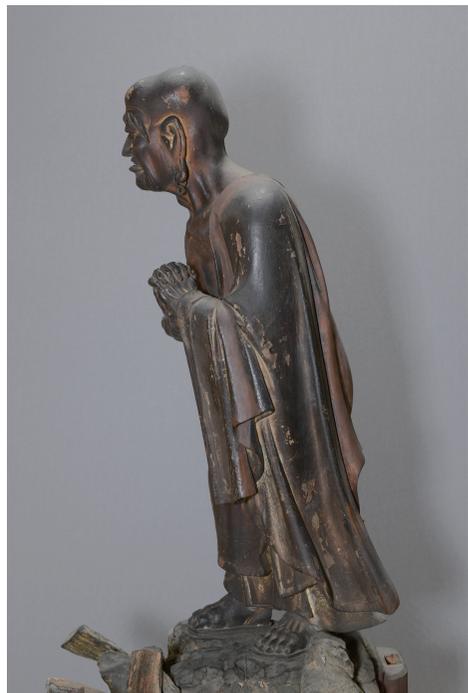


图 13 迦葉像 左側面



図 14 阿難像 正面



図15 阿難像 背面



図16 阿難像 左斜側面



図17 阿難像 右側面



図18 阿難像 左側面



図 19 迦葉像 像底



図 20 阿難像 像底



图 21 釈迦如来像 盛上文様・切金文様



图 22 阿難像 盛上文様



図 23 釈迦如来像 台座内心棒



図 24 心棒銘



图 25 心棒銘 (墨書拡大)



図 26 静岡・方広寺 釈迦如来像
観応3年(1352)



図 27 愛知・妙興寺 釈迦如来像
貞治4年(1365)



図 28 豊山町常安寺 釈迦如来像



図 29 妙興寺像 側面



図 30 常安寺像 側面